






課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号	16DC1602
氏 名 (本 籍)	陳 斌 (中国)
学 位 の 種 類	博士 (学術)
報 告 番 号	甲 第 107号
学位授与年月日	2020 (令和 2) 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	从风险的制度化到制度化的风险：数字经济时代的中国社会保障制度研究
審 查 委 員	主查 李 春利  副查 唐 燕霞  副查 金 湛  副查 沈 潔  

2020 (令和 2) 年 2 月 12 日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、陳斌より提出された博士の学位授与申請書および参考文献等関係資料により、2019年11月8日に予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項目について、審査委員の意見交換を行った。

- (1) 学位申請論文の予備審査および履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できるという結論に至った。
- (2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果、博士学位論文の基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。

2019年1月10日17:00から18:00まで、名古屋校舎本館M406教室で遠隔教学システムを使って、ドイツに研究滞在中の陳斌と学位申請論文の本審査にかかわる口頭試問を順調に行った。

まず、陳斌より、学位申請論文の趣旨、問題意識、分析の枠組み、研究方法、アンケート調査、論文の構成、論文の学術的貢献および今後の研究課題などについて説明がなされた。次に、審査委員による口頭試問に移り、すべての質問に対し、陳斌より回答や説明がなされた。

口頭試問終了後、引き続き審査委員会において議論した結果、以下の結論に至った。

陳斌の学位申請論文「从风险的制度化到制度化的风险：数字经济时代的中国社会保障制度研究」は、社会学におけるリスク社会の理論を社会保障制度の分析に応用し、リスク社会の理論に立脚しながらも、独自の分析フレームワーク「リスクの制度化」と「制度のリスク化」を構築し、それを研究対象であるデジタル経済時代における中国の社会保障制度の分析に展開した。リスク社会の理論は、ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)とアンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)を代表とされているが、彼らは工業化社会からリスク社会への変容に注目し、モダニティの帰結(consequence)として、リスクに満ちた現代社会の不確実性に分析のメスを入れたのである(第2章)。

本論文では、社会保障そのものは人類が社会的リスクの構造的変化に適応して生まれたものであり、その発展プロセスが非制度化から制度化へと進化したものである。現代の社会保障制度は、工業化社会の生産様式や労働形態、および組織構造に相応しいものであり、明確な主体関係や、政府出資ならびに多様なチャネルによる資金調達メカニズム、および政府主導による多層的な管理体制といった社会的基礎条件の上に成り立っている。だが、デジタル化時代においては、これらの基礎的な条件が大きく変化しているのにもない、現行の社会保障制度そのものも大きなチャレンジを迎えていると指摘されている。

そのような理論的検討を踏まえて、本論文は「リスクの制度化」の典型例として、工業化時代の社会保障制度について、文献研究をベースに西側諸国および中国の制度的変遷、社会保障の主な内容、制度の運用メカニズムなどの側面から体系的に整理、分析された(第3章)。

さらに、「制度のリスク化」の事例として、デジタル経済時代における中国の社会保障制度が直面している諸課題をめぐって、独自のアンケート調査およびインタビュー調査の結果をもとに、労働契約、収入の安定性、保険加入率などの指標を使って、配達員、DiDiドライバー、ネットショップ従業員などいわゆる「平台従業者」(プラットフォーム依存型の非正規労働者)などの労働環境と社会保障の関係について分析された。その結果、雇用者と被雇用者の関係の不明確化、政府管理機能の低下、資金調達の難しさ、管理体制の複雑化などの問題点が抽出された。従来の工業化社会で確立された現行の社会保障制度は明らかにデジタル化時代にそぐわないと指摘された(第4章)。

その参照軸として、西側諸国におけるデジタル化時代の社会保障制度の典型例として、保守主義

志向型のフランス、自由主義志向型のイギリスおよび社会民主主義志向型のデンマークを取り上げ、その主な政策や法制度、および運用面の特徴などについて詳しく検討された（第5章）。最後は結論と考察、および政策提言である（第6章）。

陳論文の評価すべき点は、以下の3点が挙げられる。

（1）テーマ選びは先見性があり、且つ挑戦的であること。現行の社会保障制度は、如何にしてデジタル化時代の挑戦に直視し、対応するかは、世界各国の社会保障分野において極めて関心の高い先端的な課題である。本論文は社会学の先端的な研究成果を咀嚼、検討したうえで、自ら再定義と修正を行い、独自の分析の枠組みを構築し、新しい解決策とソリューションを模索することは、今後の中国社会保障制度の研究にとって新しいフロンティアを作り出す可能性を秘めている。

（2）文献調査が詳細であり、特に海外の社会保障分野の関連文献の発掘、整理および解説が丹念であり、独自の見解も多くみられる。本人がアメリカやドイツに留学していた経験と調査研究の蓄積がよく活かされている。このような広い国際的な視野が今後の中国社会保障研究に寄与できるであろうと期待している。

（3）研究方法および論理一貫性の面で一定の独自性がみられる。社会学の分析概念を社会保障研究に応用し、独自の分析フレームワークを構築したうえで、定性分析と定量分析、歴史分析と現状分析を結びつける工夫がなされている。特に第2章「理論基礎与分析框架」および第3章「風険的制度化：工業化時代的社会保障制度」において、そのような研究の特徴がよく表れている。

以上のような評価すべきところがあると同時に、陳論文に不足しているものとして、以下の諸点が指摘できる。

（1）デジタル経済時代の中国社会保障制度が直面する危機を論証するための実証的データが不足している。独自の調査で入手したデータの中で、例えば、ネットショップ従業員、配達員、DiDiドライバーのような業種はデジタル経済時代を代表できるかどうか。また、調査対象都市は北京、杭州、成都に限られており、サンプリングの代表性と抽出されたデータの説明力には若干不安が残る。これらのデータを以て、比較的大きな結論を導き出すにはやや弱いような感が否めない。また、非正規労働者の中にはいわゆる農民工が多数を占めているので、都市・農村という中国特有の二重構造や雇用面の違いも社会保障制度の問題点として無視できない要因である。

（2）結論と政策提言の部分のまとめは、やや性急な感が否めず、3つの政策提言もやや平凡であるという批判を免れがたい。全体としては、大きな研究課題が提起されたが、実際それを支持するデータや資料が入手しにくいので、独自のアンケート調査やインタビュー調査を実施するにあたって、調査設計を含め、オペレーションレベルにおいてより一層工夫を重ねる必要がある。

以上を踏まえて、審査委員会において、問題点はあるものの口頭試問などを通じて将来的に解決されるであろうとの感触を得ており、全員一致で本論文が全体として愛知大学大学院の博士学位論文諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以 上